



今回の全国会議は、労働者協同組合法の施行と共に、協同労働によるワーカーズ・コレクティブ運動をさらに前進させるため、その使命と働き方の価値を再確認し、全国的な運動の拡がりをめざすとともに、多様な団体との連帯による、持続可能な地域社会づくりのあり方を発信していくというテーマを掲げ、奇しくも、ワーカーズ・コレクティブ誕生から40年を迎え、さらにその発祥の地である神奈川で開催された。コロナ禍でオンラインでの開催となったが、全国から1,000人を越えるワーカーズ・コレクティブをはじめ、協同組合関係者、研究者、NPOの方々などの参加があったことが何よりの成果といえる。

初日6つの分科会と翌日には3つの自主企画、午後「全体会」が行われた。ワーカーズ・コレクティブ協会としては、自主企画「困窮者支援を組合員と共に拓く ～生活クラブとワーカーズ・コレクティブ協会のまちづくりの実践～」を企画、参加した。自主企画の中では、「市民社会を拓く」という理念を持ち取り組んできた協会の18年間の成果として「困窮者支援によるまちづくり」の実践についての報告を行った。170余名の参加を得て、困窮者支援への関心の高さがうかがわれた。

全体会では、斉藤幸平氏による「協同組合による人新世」というテーマで講演。斉藤氏からは、「経済発展を求めてきた結果として、格差・分断・孤立を招いた。そのためには経済・労働を民主化させていく必要がある。単なる物質だけの潤沢さ（＝消費主義）ではない協同的富の創出が必要。シェアして、自分たちで自治、管理する実践（アソシエーション）がいま求め



られている。行政任せでなく、行政・地域住民が手を結び問題解決するなど。日本ではSDGsがもてはやされているが、もっと大きなシステムチェンジが必要。」と警鐘を鳴らした。最後にマルクスの共産主義について「労働者たちのアソシエーションである協同組合が互いに連合し、社会的生産を調整する、そのようなシステムであった」と語り、「そのための想像力を開放するような実践をすすめるべき」とまさに人新世・協同労働、アソシエーション社会へのエールとなった。

続いて、神奈川ワーカーズ・コレクティブ連合会、NPO法人ワーカーズ・コレクティブ協会、生活クラブ神奈川の3団体による事例発表が行われ、生活クラブ神奈川半澤氏から「生活クラブ神奈川はワーカーズ・コレクティブとアソシエーションを真ん中に置く地域づくりをめざしていく」という発言があった。まさにこの神奈川から全国へ「協同の力による持続可能な地域づくり」に向けての力強い宣言となった。

(上田 祐子)

第一分科会 孤立と分断に立ち向かう

これからのワーカーズ・コレクティブ運動

～労働者協同組合法成立から見える成果と課題～

コーディネーター：小柳智恵 パネラー：WNJ 副代表 井上浩子 /  
WNJ 代表 藤井恵里 /生活クラブ連合会常勤理事 前田和記 /  
協同組合研究者 田中夏子

第一分科会は実践者、生活クラブ、研究者からの報告で282名が参加しました。初めに井上さんからWNJの活動とワーカーズ・コレクティブ法制化の歴史、労働者協同組合法（通称ワーカーズ法）成立に至る経過の報告がありました。

続いて藤井さんからワーカーズ法の目的文はワーカーズ・コレクティブが目指してきたことであり「やむにやまれぬ思い」から始まったワーカーズ・コレクティブがコロナ禍で孤立や分断が深刻化し規格化する社会に抗い、自分らしく人らしく生きていくためにイノベーションをどう起すか、ワーカーズ法を機にワーカーズ・コレクティブ運動を拡げるチャンスとしたいとの報告がありました。

前田さんからは第7次連合事業中期計画案（2022～26年度）の組織政策を「社会的連帯経済」とし、ワーカーズ法の成立を機にワーカーズ・コレクティブ運動推進に向けて生協として積極的に取り組むことの表明がありました。

話題提供で、田中さんからワーカーズ法制定を受けて大切なことは「法の器に乗る実践とそこからあふれる実践との連帯がワーカーズ法を活かす道」と明快な提起がありました。（WNJワーカーズ法ガイドブック参照）市場の論理に乗れないものを社会がどう育てるのか、それがワーカーズ法の意義であり法律を通じてどう引き出すかを考えて行く必要がある。第29条に協働労働を総会で検証する規定がある意味は大きいとのコメントがありました。



また法制定に尽力された柘屋前参議院議員から「法律はあくまで社会の最低のルール、どのように花を添え木を植えるかは皆さんにかかっている」と飛び入りで激励がありました。

ワーカーズ法制定から一年余が経過し、協働労働への着目度が上がっています。全てのワーカーズ・コレクティブが法制定の意義について学び、自分たちに引き寄せて自覚的に向き合い、地域をつくり・変える契機として活用する責任があることを学びました。

（中村 久子）



登壇者プロフィール

- ・藤井恵里（WNJ 代表）生活クラブ愛知の配送と事務局を受託する「(企)ワーカーズ・コレクティブ・グラン」を2004年に設立。2012年愛知ワーカーズ・コレクティブ連合会を設立しWNJに加入。2018年～WNJ代表
- ・前田和記（生活クラブ事業連合生活協同組合連合会常勤理事）生活クラブ連合会は、北は北海道から西は兵庫県まで33の生協（組合員約41万人）と生活クラブ共済連を会員とする事業連合です。当職は、その常勤理事・企画部長を務めています。
- ・田中夏子（協同組合研究者）イタリアの社会的協同組合（社会的排除と闘う活動）やコミュニティ協同組合（再生可能エネルギー等地域資源を軸とした、イタリア中山間地の地域再生）等を研究しています。2013年から長野県佐久市にて農園 Vento e Terra（風と土）園主。長野県高齢者生活協同組合 理事長（2019.07～）

## 第1分科会参加報告

WNI 全国会議第6分科会も申し込んでましたが、途中で気になる第1分科会に参加しました。パネラーのワーカーズ・コレクティブ 連合会専務理事井上浩子さんや WNI 代表藤井恵里さんの話は、労働者協同組合法成立以前から何度か伺っていました。そして協同組合研究者田中夏子さんのお話も伺った事がありました。長年 W.Co に関わり、私たちにピッタリの法人格がない…とありあえず法人格が欲しいと NPO 法人取得。

生活クラブ事業連合前田和記さんの話は、私にとってとても新鮮で強烈なインパクトがありました。食の安全や環境によい消費財を共同購入する生協なんだということで加入し、組合員活動は今一つでした。ひよんなきっかけでワーカーズ・コレクティブ 運動に関わり今に至ります。

今回の生活クラブがワーカーズ・コレクティブ と一緒に社会的連帯経済に担い手と言われて、運動する生活クラブ生協ってすごい組織なんだと再確認しました。面白がっている私にとって目から鱗です。ワーカーズ・コレクティブ 運動の強みは地域に暮らす組合員が地域に必要なディーセントワークを自らが作り出し・拡げられる。そして生活クラブとワーカーズ・コレクティブ は両輪と。連合することや続けることの大切さが伝わりました。「働くことを通して地域を豊かにしたい。」「たすけあい認め合って働きたい。」心にズシンとききました。

ワーカーズ・コレクティブ 法成立が望ましいが、とりあえず一歩進んだことは嬉しい。「労働者」という言葉はしっくりしませんが、変化を楽しみたい。（網屋 正子）



## 寄稿

### 自主企画

#### 「困窮者支援を組合員と共に拓く」に参加して

横浜みなみ生活クラブ理事長・籠嶋雅代

生活クラブ神奈川、さがみ生活クラブ、湘南生活クラブでは、ワーカーズ・コレクティブ協会との共同企業体で、座間、湯河原、平塚で就労準備支援事業を受託しています。さがみ生活クラブ・湘南生活クラブでは、この取組みを行う中で組合員の地域課題に対する認識と当事者意識が生まれ、そのことに興味や関心を持つ組合員が確実に増え、地域づくりとしてボランティアやアソシエーションの参加に繋がっているのだと改めて知りました。生活困窮者支援は、個人的な問題解決のみならず、そのことを生み出す地域や国の課題に直結し、地域生協として取組むことで、多くの組合員の気づきにつながっています。取組む意義は大きいと感じました。

横浜みなみでは、さがみや湘南のような受託事業はありませんが、旭センターで就労準備実習生の受け入れなどをおこない、実際にはたらく場となっています。また、センターの清掃を W.Co はっぴいさんに委託していて、顔なじみのメンバーさんも増えました。好きなこと、嫌いなこと、得意なこと、苦手なことが大多数の人と同じではないことを困難として括るのか、個性として捉えるのかで、感じ方も印象も変わります。誰にとっても、好きなことや得意なことを生かせる場があるのが豊かな地域だと私は考えます。

本田由紀先生が、奥田知志さんの「支援という言葉は、いまのあなたがダメだという意味を含んでいるので、共に生きるというスタンスでいたい」という言葉を紹介してくださいました。「共に生きる」を認め実現できる土壌がワーカーズ・コレクティブにはあります。生活クラブが地域づくりの活動として推進しているアソシエーションもまた、多様な参加を生み出します。私たちの持つ様々な仕組みを使いながら、誰もが尊重され、得意な力を発揮できる地域の実現につなげていきたいと、この企画に参加して強く思いました。



設立：2010年11月

所在地：

国分寺市・府中市

**寄稿** ワーカーズ・コレクティブと生協で社会的事業に取り組む価値を実感！

一般社団法人ワーカーズ・コレクティブふるぼの工房 藤木千草

2004年にワーカーズ・コレクティブ協会（以下、協会）が設立された時から、活動を傍観させていただいていますが、久しぶりに「岡田節」による実践報告を聞きながら、大きく発展されていることに改めて感服しました。互いの事業強化・継続や新たな主体を増やすためのワーカーズ・コレクティブ連合会とは別の組織として、「市民参加の新しい公共の実現」をめざして、協会が発足しましたが、当初は、具体的に何をしていくのか、判然としていなかったかと思います。その後、イタリアの社会的協同組合視察、県内のワーカーズ・コレクティブ実態調査を経て、2005年から横浜市の障がい者の職場体験協力事業を受託することになりました。行政からの事業受託は、大きな転機だったと思います。

また、同年12月に横浜で開催した第7回 WNJ 全国会議の分科会「障害者と協働で働き場づくり」を機に「共同連」からの刺激を受けて、協会のテーマが「就労困難者の働く場としてのワーカーズ・コレクティブを拡げること」に絞られていきました。国の制度としても、障害者自立支援法（2006年4月）、生活困窮者自立支援法（2015年4月）により、様々な施策が実施されることになり、その機をとらえ応えてきたと言えます。

そして、就労が困難な方たちは、働く場だけではなく、働きに行ける生活習慣をつくることが必要なことに気づき、その支援にも取り組むこととなります。座間市の就労準備支援事業の担い手として、生活クラブ生協と協会の共同企業体で応募し、2017年10月から業務を受託しました。相談や研修・交流の場を「はたらっく・ざま」という名称で周知し、現在57人の利用者がいます。座間市のチラシには「座間市就労準備支援事業は、共同企業体（生活クラブ・NPO ワーカーズ・コレクティブ協会・さがみ生活クラブの3者）が運営しています」と表記されています。すごい宣伝効果です。

この共同企業体による事業が評価され、2019年から湯河原町、2021年から平塚市でも開始しています。それぞれ「はたらっく・ゆがわら」「はたらっく・ひらつか」と名称をそろえていますが、人口や特性が異なるなかで、臨機応援に対応することが求められます。そこで重要な役割を果たすのが生活クラブ生協です。横浜市には約100団体のワーカーズ・コレクティブがありますが、座間市には7団体、平塚市には5団体、湯河原町にはまだありません。就労体験をする場を探すことも一苦勞ですが、組合員が可能性のある事業所を紹介したり、ボランティアスタッフとして交流会企画、居場所づくり、学習支援などの活動を行っています。

さがみ生活クラブ生協（矢野理事長）と湘南生活クラブ生協（飯田理事長）が、学習会を重ねて就労困難者への理解を拡げ、イベントでの協力・センターなどでの実習受け入れ・たすけあい活動などを通して、「ワーカーズ・コレクティブを創出して就労の場を増やしたい」「居場所と出番がある地域をつくりたい」「待たなしの自分の問題だ」と展望を話されました。具体的な必要性による力強い活動方針です。

研究者の本田由紀さんは、持続可能でない日本の現状に対して、地域単位での支援の仕組みで社会の足りない機能を補うことが必要であり、その「共に生きる」実践をおこなっていると評価されました。

就労の場としてのワーカーズ・コレクティブへの対応・行政への企画提案や業務受託の煩雑な事務手続き、生活クラブ生協への働きかけと活動提案などなど協会の事業は八面六臂です。困窮者支援という共通の目的のもと、協会は各組織の活性化も促している支援組織と言えるでしょう。